南葵音楽文庫ミニレクチャー　Vol.5　記録

『徳川頼貞と明治のうた』

林淑姫

2018 年 1 月 13 日（土）11：00
南葵音楽文庫閲覧室（和歌山県立図書館内）

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500

徳川頼貞（1892-1954）が幼少時に聴き、歌った明治のうたの幾つかを、自伝『薈庭楽話』に拠ってたどります。彼の音楽の原風景を街に流れていた音楽を通して探りたいと思います。

頼貞は音楽との出会いを「私が三、四歳の頃日清戦争が勃発した。海軍軍人の葬列は必ず私の家の前を通って青山の斎場に向うのを常とした。嚠喨たる喇叭の音とともに芝山門の方から一歩一歩近づいてくる音楽が聞こえてくると、幼かった私は家のものに抱かれてわが家の門の前にたち、その葬列を迎えそうして見送った。」と記しています。冴えわたる楽隊の響きは幼い頼貞の耳をとらえたようでした。

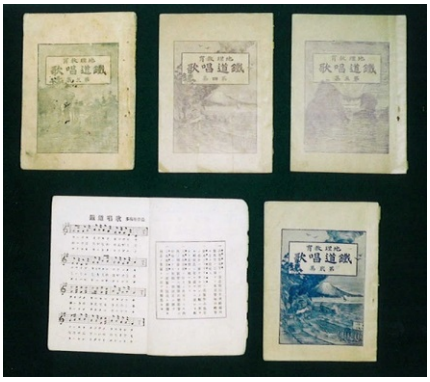
日本のうたは、唱歌や讃美歌、軍歌から始まりました。明治 10 年代に編纂された『小学唱歌集』（音楽取調掛編　全 3 集。明治 14～17）や 20 年代の『中等唱歌集』（東京音楽学校編明治 22）刊行の頃のうたは、欧米の愛唱歌の旋律に新しく拵えた日本語の歌詞をあてたものがほとんどですが、日清戦争前後から軍歌を中心として、日本人の作曲による作品が続々と生れます。明治の軍歌は戦をテーマにした唱歌でもあって、学校でもよく歌われ、はやり歌にもなりました。『薈庭楽話』に記された曲はいずれも、日清戦争前後、明治 30 年代初め頃までに作られています。彼の記憶に残る楽曲はドイツ民謡をもとにした唱歌や、軍歌でも明るく伸びやかな曲調の作品が多く、後年の好みに通じているようです。

徳川頼貞の記憶に残るうた
◎軍歌
「道は六百八十里」石黒行平詞　永井建子曲（『音楽雑誌』、明治 24.5.24 刊）
「四百余州」（「元寇」）永井建子詞・曲（『音楽雑誌』19 号、明治 25.4.25 刊）
「雪の進軍」永井建子詞・曲（『大東軍歌』明治 28.10 刊）
「渡に易き安城の」（「喇叭の響き」）加藤義清詞　荻野理喜治曲（『明治軍歌』明治 27.11.4 刊）

◎唱歌
「霞か雲かはた雪か」（「霞か雲か」）　加部厳夫詞　ドイツ民謡「春の訪れ」（『小学唱歌集初編』明治 14.11）
「織なす錦」作詞作曲未詳（『中等唱歌集』明治 22.12）
「鉄道唱歌」大和田建樹詞、多梅稚ほか曲（『地理教育鉄道唱歌』全 5 集　明治 33.5-10 刊）
「世界一周」大和田建樹詞　多梅稚、納所弁次郎曲（『地理教育世界唱歌』？　明治 33）

「元寇」「霞か雲か」および軍歌「抜刀隊」など音源で紹介。「鉄道唱歌」和歌山編を参加者全員で歌唱。

小学唱歌集（音楽取調掛編　明治 14-17）
「霞か雲か」は初編所収。「初編」には
「見わたせば」（ルソー原曲　J.B.クラーマー作曲、
柴田清熙、稲垣千穎詞）、「蛍」（「蛍の光」スコットランド民謡、
作詞者未詳）なども収録。



「地理教育鉄道唱歌」全５集　大和田建樹詞　全 334 節
（大阪、三木佐助、明治 33.5-10 刊）
第１集　東海道（上眞行、多梅稚曲）
第２集　山陽、九州（第１集に同じ）
第３集　奥州線－磐城線（田村虎藏、多梅稚曲）
第４集　北陸地方（納所辨次郎，吉田信太曲）
第５集　関西，参宮，南海各線（多梅稚曲　２種）

歌詞・第５集（全 64 節）より
五〇　紀の川口の和歌山は　南海一の都会にて　宮は日前国懸　旅の心の名草山
五一　紀三井寺より見わたせば　和歌の浦波しづかにて　こぎゆく海士（あま）の釣船はうかぶ木の葉か笹の葉か
五二　芦辺のあしの夕風に　散り来る露の玉津島　苫が島*には灯台の　光ぞ夜は美しき
五三　蜜柑のいづる有田村　鐘の名ひびく道成寺　紀州名所は多けれど　道の遠きを如何にせん
五四　みかへる跡に立ちのこる　城の天守の白壁は　茂れる松の木の間より　いつまで吾を送るらん

*苫が島（とまがしま）は友ケ島（ともがしま）の別名。現在は友ケ島でよばれる。